

# 人間の経済

Ningen no Keizai

Gesell Research Society Japan.

「人間の経済」、第74号、03年9月15日刊

## 目次

利子ともインフレとも無縁な貨幣（第一部、第一章）  
マルグリット・ケネディ  
今井 重孝 訳

## はじめに

### 第 部 問題とその解決

#### 第1章 お金の機能に関する基本的な四つの誤解

第1節 第一の誤解 - 成長には一種類しかないという誤解

第2節 第二の誤解 - お金を借りたときだけ利子を支払うという誤解

第3節 第三の誤解 - 現在の貨幣システムはすべての人に平等に利益をもたらして

いるという誤解

第4節 第四の誤解 - インフレはどの貨幣システムにもついてまわるとい

う誤解

## 利子ともインフレとも無縁な貨幣 - 第一部、第一章 -

マルグリット・ケネディ

今井 重孝 訳

### はじめに

「公共建築物と世界的建築物」に関する論文で博士号を取った、建築家で都市計画家、それにエコロジストである私が、どうしてお金についての本を書くようになったのでしょうか。

この問いに答えるには、私が西ベルリンでの国際建築博覧会（IBA）で、エコロジー/エネルギーという研究領域を主宰していた1979年から1984年に遡らなければなりません。これとの関連で、初めて、都市空間で、包括的なエコロジー・プロジェクトを計画し、実施することができたのです。国の内外での数多くの招待講演で、私たちの仕事は世論や専門家の大きな注目を浴びましたが、同時に、私たちの仕事に懐疑的な人々もいました。「確かに、そのプロジェクトは重要だし美しい。しかし、非経済的で、通常、お金の面では割が合わない。」と頻りに云われました。このとき、私たちの理想を実現することは、たんに建築上の問題であるばかりでなく、いわゆる人類の生き残りの問題でもあることに気がついたのです。

すでに1979年から1980年にかけて、都市の生物学的な基礎 - - 空気、水、土地、エネルギー、食物 - - が、大いなる危険にさらされていることが明らかになりました。つまり、私たちが、経済的にこの生物学的基礎を改善し、維持していくことができないとしたら、私たちは、中長期的には、滅亡することになるにちがいないのです。

経済問題がますます決定的な力もちつつあるのです。私は世界的な、優れた理念を持つ善意の人々に出会いました。どのようなエコロジー上の問題も技術的には解決可能なのでした。これまで不足してきた、そして今も欠落しているのは、解決策を幅広く実施するための経済的、政治的前提なのです。簡単にいえばお金が足りないのです。エコロジー的な対策やプロジェクトにとってはいろいろな面でお金をめぐる戦いが必要でした。第一に、エコロジー的プロジェクトには、導入段階、転換段階にあるため、多大の費用がかかりました。第二に、長期の経済的観点はまだ、融資基準や建築の決定、建築資材や建築技術の選定の基礎とはなっていなかったのです。第三に、空気や水、土地はしばしば大した費用も支払われず好き放題に扱われていたのです。これらの保護や課税のための新たな法的基礎が採用されようとはしていましたが。

しかし、私は、 - - おそらくは最も重要な - - 戦線の存在に1983年まで気づきませんでした。それはお金の利子を前提とした力、お金を増やす力、言い換えれば、どのようなエコロジカルな対策も、資本市場で調達した利子を支払えるものでなければならぬという事実でした。自然界及び金融の世界における様々な成長モデルを知り、現代社会の病的なまでの経済成長への強制力の原因を知ったとき、私は、怒りに打ちふるえました。私は、私の40年あまりの人生の間、日常生活を支える基本前提の一つ、つまり貨幣システムの機能を全く知らなかったのです。至る所で、見知らぬ人も、知人達も、

同僚達も、専門家達も、貨幣システムについて、かつての私と同じように無知であることを経験し、私は、お金について、読書し、議論し、そして書き始めました。

私たちがいや遅くとも私たちの子供たちは、こうした破壊的なシステムによって、近い将来最悪の経済的、エコロジー的破滅を迎えるだろうとの思いと、そしてまた現在の貨幣システムのもたらす帰結についての人々の無知のひどさが、お金についての本を書く気にさせたのです。最初は、いくつか短い文章を書きましたが、多くの人に読んでもらえ、またコメントもいただきました。

しかしながら、本書のような観点から貨幣を把握するまでには、つまりは、純粹に経済的な問題としてでなくて、むしろ「公的でかつ世界的な関心事」として貨幣を把握するようになるまでには、さらに5年かかりました。私は、建築学で博士号を取りましたので、経済学は素人でしたが、職業人にとっては基本的な計量単位であるお金を扱う経済学書を書き始めたのです。

私が目指したのは、読みやすくわくわくするような入門編を書くことでした。多くの人たちに、経済変革の可能性、その持つ問題性と背景を知っていただくよすがとなればと思ったのです。

1988年に本書が出版されてから、世界は、劇的に変化しました。社会主義諸国は、自由な市場経済でなくともやっていけるという実験に失敗してしまいました。これを封じることにより、社会主義諸国は、経済の本当の姿が価格で表示されないようにしたのです。しかし価格には、当時の東側諸国の人達も気づいてはいませんでした。経済的に社会主義よりダイナミックな資本主義にあっては、これまでエコロジー的な、また社会公正的な側面が織り込まれていなかったのです。この欠陥は、大物政治家の交代によって除けるものではないのです。この難点は、巧妙に貨幣システム、さらにはまた土地法と租税法の奥深くに隠されているのです。この難点を除くためには、多くの人達が、このことを知り考え方や行動を変えなくてはなりません。

東側諸国が、西側諸国からの輸入や借款に門戸を開放したため、貨幣システムのもつ問題性が世界中で広まる速度がますます速くなっています。いまでは、誰もが、第三世界の諸国が借金を返すことが出来ず、高度産業化社会においても富者と貧者の格差がますます広がり、対症療法では事態が悪化するだけであることに、気がついています。先に見える経済学者や銀行家たちは根本的な変革を要求しています。本書はまさにこの根本的な変革をテーマとしているのです。

本書では、貨幣の機能を示し、私たちの最も大切な尺度の一つが常に揺らいでいる理由を明らかにします。言い換えると、貨幣は、何故、世界を「動かす」だけでなく、いつもいつも破壊的な危機を引き起こすのかについて、説明します。第三世界の膨大な借金、失業や環境問題、兵器の生産や原子力発電が、今日貨幣を流通させているメカニズムつまりは利子といかに密接に結びついているかを示します。複利（利子にさらに利子をつけること）とあいまって、利子は経済的な過剰成長や、貨幣資産の集中や不平等な配分の主要原因の一つなのです。アメリカの経済史家ジョン・L・キングによれば、利子は、いわゆる自由な市場経済における、「見えざる破壊マシン」なのです。

本書の関心は、少数の専門家にしか知られておらず、広範囲な人々には全く知られていない変革の可能性を示すことにあります。このテーマは、専門家とみなされる人達だ

けに任せておくにはあまりに重要すぎます。公に議論され、大勢の人に理解される必要があるのです。それゆえ、私の叙述の特徴は、この複雑なテーマをできるだけ単純化して示し、お金と関わり合うすべての人が何が問題なのかを理解できるようにすることにあります。本書には、さらに二つの特徴があります。かつてこのテーマを扱った本と異なり、本書は、提案されている新しい貨幣システムへの移行が例外なくすべての人に利益を与えることを示しています。そのうえさらに、必要な変革をもたらすために誰もが自分でできる方法を示しています。

今日貨幣を流通させている利子のメカニズムを、別のより適切なメカニズムに変えることは、みかけほど困難ではありません。ここに示されている解決の基本原理は、歴史の中で、様々な国々で試されたものなのです。しかも、今世紀の始まり以降少なからぬ場所で成功したのです。現在の課題は、この成功した解決法を、地域レベルで、国家レベルで、また国際レベルで幅広く試してみるることなのです。

## 第 部 問題とその解決

### 第 1 章 お金の機能に関する基本的な四つの誤解

地球上のほとんどの人は、日々貨幣を使用しています。しかし、貨幣がどんな機能を果たしているか、貨幣が人間の生活に直接的にまた間接的にどんな影響を与えているかを正確に理解している人はきわめて少ないのです。まず、この現象のプラスの側面を見てみましょう。貨幣は商品やサービスの交換を素晴らしく容易にしました。これにより、分業による経済がはじめて可能になったのです。だから、貨幣は、人類の最も天才的な発明なのです。例えば、私たちが、物々交換しか知らない村で生活するとしてみましょう。そしてそこで葬儀屋しか興味を示さない芸術作品を造るとしましょう。そうすると、私たちは、この芸術作品を棺と交換できるだけなので、やがて制作をやめなくてはなりません。棺のかわりに貨幣が手に入れば、私たちは、必要なものすべてと交換できます。ですから、貨幣は専門化を可能とし、そのゆえに、文明の基礎を築くわけです。

貨幣は確かに商品やサービスの交換の役に立つのですが、問題は、貨幣が流通しなくなると交換を妨げるという点にあります。こうして、一種の「私的な税関」が生まれます。そこでは、自分が必要とする以上の多くの貨幣を手にする者が、貨幣を持たない者に対して、「貨幣利用の代償」あるいは利子を強要することができます。経済学者はたいていの人々と同様、利子を貨幣の価格と考えています。他のすべての商品に対し価格分のお金が支払われなければならないように、あらゆる商品の中で最も選好される - 貨幣 - に対しても価格分のお金が支払われるのです。一見するとこれは正当で論理的に見えます。しかしこれは公正な取引なのでしょう？いえ、いえ、決して公正ではありません。実際、現在の私たちの貨幣システムは、やがて示されるように、今日のすべての民主主義国家において憲法違反なのです。

この点をご説明するために、貨幣にまつわる四つの誤解を詳しくご紹介する必要があります。もちろん、誤解が、四つしかないという意味ではありません。貨幣についての私たちの考え方は、私たちの内なる世界像を正確に写しているのですから、貨幣の

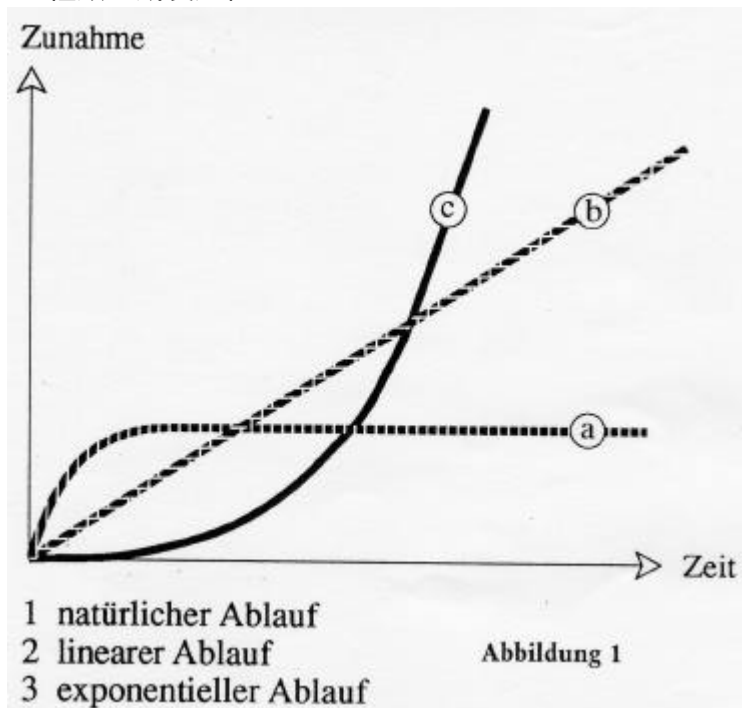
イメージは、地球という惑星に住む人間の数と同じくらい多様です。とはいうものの、以下に述べます四つの誤謬は、現在の貨幣システムの構造上の欠陥を理解する上での主要な障害物なのです。この四つの誤謬を示すことにより、新しい貨幣システムがいかなる可能性をもつかを明らかにすることができますでしょう。

### 第1節 第一の誤解 - - 成長には一種類しかないという誤解

私たちは、成長には一種類しかないという考え方にとらわれがちです。つまり、私たち自身が体験しているような成長です。しかし、私たちにはなじみが少ないのですが、他にも成長の種類はあるのです。

----- 図表 1 -----

図表 1 三種類の成長過程



- 1 . 自然的成長過程
- 2 . 線形的成長過程
- 3 . 指數的成長過程

『空には木は生えない』ということわざがあります。この規則は、有限な場所での、したがって地球上もそうですが、あらゆる成長過程に当てはまります。(bのような)常に同じ成長率で成長するとかまたさらに急激な成長率(c)で成長するとかいうのは、自然に反しています。このことは、経済発展にも当てはまります。経済発展も自然法則に従います。従って、自然法則を破れば、報復されることになります。しかしながら、この事実が日々明白になっているにも関わらず、世界のほとんどすべての責任ある政治家達は、さらなる経済成長を求めているのです。(ヘルムート・クロイツ)

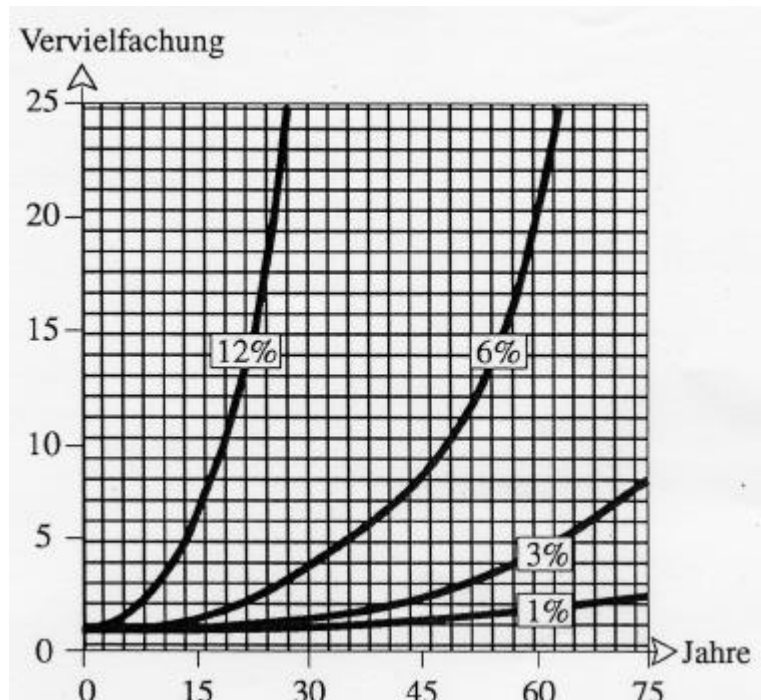
図表 1 : 曲線 a は、自然界の天然の成長行動を単純化した形で示しています。私たちの体も、植物も動物もこの成長曲線に従っています。私たちは、生涯の早い時期に急速に成長し、その後、ゆっくりと成長し、通常 21 歳を超えると身体的な成長は止まります。21 歳以降は、つまり私たちの人生の最も長い期間、私たちは、質的には変化しますが量的には変化しません。生物学者はこの曲線を「漸近線」と呼んでいます。しかし、図表に示されていますように、ほかに根本的に異質の二つの成長モデルがあります。

曲線 b は、機械的成長ないし直線的成長を示しています。すなわち、人間が増えれば商品も増え、石炭が増えればエネルギーも増えるといった関係です。このモデルは、私たちの分析にとってあまり重要ではありません。とはいえ、このような同じ割合での増加ですら、限られた容量の地球上では、維持不可能であることに留意する必要があります。

重要なのは指数的にすなわち倍増する割合で成長する曲線 c の理解です。この曲線は、曲線 a のまさに対極をなすものです。曲線 c においては、成長は最初非常にゆっくりと経過し、やがて着実に増加してゆき、最後はほとんど垂直な傾きの量的増加に移行します。自然界においては、こうした成長は通常、病気や死に関わるところで見られます。例えば、癌は、指数的な成長に従います。癌は最初ゆっくりと成長します。1つの細胞から2つの細胞が、そこから4、8、16、32、64、128、256、512といった具合に。癌は、従って常に成長が速くなります。だから、癌を発見した時は、しばしば、もはや、治療不可能あるいは少なくとも沈静化不可能となってしまう。

指数的な成長は、通常、自分の寄生する「宿主」ないしは有機体の死をもって終わります。ですから、この成長に対する無理解が、貨幣についての誤った考えを生み出し悲惨な結果をもたらしているのです。貨幣は、利子や利子の利子(複利)により定期的に、貨幣の量を倍増していくからです。貨幣は利子により指数的な成長を遂げるのです。だから、いままでも定期的にまた現在も私たちの貨幣システムは、困難に陥るのです。実際利子は私たちの社会構造の中で癌のように振る舞うのです。

..... 図表 2 .....



同じ%で成長を続ける場合、決して適正な成長にならないで、絶えず増加分が増大する形の成長、つまり指数的成長になってしまいます。最初の金額が、同じ時間的間隔で倍々に増えていくのです。増加の%の値が大きいほど、倍増する期間は短くなります。しかし、1ないし3%といった小さな値でも、おしまいには、信じられない増加量になるのです。ですから、経済界でできるだけ高い%の利子を要求する人は、自分の言っていることを理解していないのです（ヘルムート・クロイツ）。

図表2は、投資されたお金が二倍になるのに必要な期間を示しています。3%の複利だと24年かかります。6%の複利で12年、12%で6年かかります。

1%であっても複利で行くと、72年で倍増する指数的曲線になります。

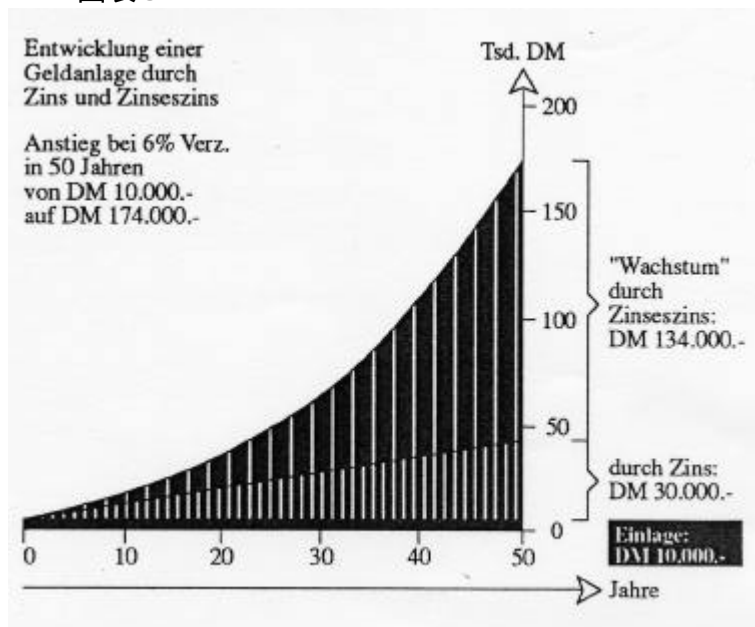
私たち自身の身体的成長からすれば、最適な大きさと成長が止まる（曲線a）自然の成長しか視野に入りません。それゆえ、ほとんどの人にとって、指数的な成長が物質世界で実際に如何なる意味を持っているかについて理解することが困難なのです。身体的成長とは別の生物学的成長経験もまたあるのです。指数的な成長を、私たちは頭で意識的に理解しなければなりません。そうしてはじめて、例えば私たちの貨幣システムにおける指数的成長を変えることができるのです。

指数的な成長の理解を促進することがいかに困難であるかは、以下のアナロジーが証明します。ヨゼフが息子キリストの誕生の時に、5%の利子で1プフェニヒ（1マルクの百分の1）投資したとします。そして、ヨゼフが1990年に現れたとすると、地球と同じ重さの黄金の玉を、銀行から13億4000万を引き出すことができるのです。永久に級数的な成長を続けることが不可能なのは火を見るよりも明らかでしょう。しかし、利子による増加分を毎年、利子の付かない口座に入れ直すとする、1990年には、天文学的数字の代わりに1マルク弱（正確には0.995マルク）たまるに過ぎな

いのです。何たる違いでしょう！

残念ながら、利子はそう簡単に制限できません。利子が支払われると、また利子に利子をつける必要が生まれてきます。そこから複利効果が生まれてきます。50年間という限られた短い期間の間にお金がどれだけ増えるかを、図表3が示しています。

.....図表3.....



図表3 複利効果によるお金のエスカレーション

年利6%で50年間預けると1万マルクが17万4千マルクとなる。

ふつう金融資産は勤労所得を倅約するところから生まれます。しかし、国民経済の歴史が長くなればなるほど、また既存の金融資産が大きくなればなるほど、金融資産は「ひとりでに」暴利をむさぼり始めます。すなわち、金融資産は、利子及び利子の利子（複利）によってつまりは複利効果によって、増殖するのです。

グラフに示めされているように、自然に逆らう複利効果は1年目にはほとんど目立ちません。しかし、時が経つにつれて、単利計算の利子の数倍にもなってしまいます。例えば、年利6%で資金を預けたとすると、50年後には、単利だけでも最初の資金の4倍になるのです。複利分を上乗せするとなんと17倍にもなるのです。こうした雪崩のような成長が、崩壊で終わらざるをえないのは、火を見るよりも明らかでしょう（ヘルムート・クロイツ）。

私たちの生きている時代に関連づけてみると、次のようになるでしょう。統計的に見ると、ドイツ市民は平均10万マルクの資産を持っています。全員が、1990年のドイツ再統一に際して2万マルクを手に入れましたが、これは、ほぼ1年間の生活費にあたります。これを年利5%（5%の利子というのは歴史的に支払われてきた平均的な利子です。）複利で預金したとします。そうすると、62年後には、計算上（利子率が変わらなかったとして）私たちは全員、私たちの子どもも孫も年金生活に入ることができます。というのは、62年後には、2万マルク預けたすべての人々が、毎年利子として



2万マルク受け取るようになるからです。そして、その後永久にです。すべての市民が、日光浴をし失業問題は完全に解決します。だれも働く必要がないのですから。しかし、全員が金利生活者となり働く必要が無くなったとすると、請求権の崩壊が起こります。すなわち、誰も働かないとすれば、銀行の収入となるべき利子を支払う人、「社会的生産物」つまり、食料や衣料、住居を造る人がいなくなるわけですから。

ポール・C・マーティンは言っています。「資本主義者は算術ができないのです。これが資本主義の真実なのです。」別の言い方をすると次のようになります。継続的で長期の複利の支払いが不可能なことは数学的に証明できるのです。ここに、経済的必要性と数学的不可能性とは解決不能の矛盾に陥ります。この矛盾が、過去においても又現在においてもますます少数者の手に資本を集中させ、その結果、経済恐慌や戦争や革命が引き起こされるのです。

今日では、利子のメカニズムは、単にそれだけにとどまらず、よく知られているように環境破壊を伴う病的なまでの経済成長圧力の主要原因となっているのです。投資がなされるのは、銀行に預けておく場合以上の利子が支払われる場合、あるいはまた借りたお金の利子以上の収益がある場合にかぎられてしまいます。だから利子こそが、経済成長のスピードを規定しているのです。

利子によって規定されたお金の指数的増大の問題を解決するには、質的成長曲線（図表1の曲線a）に従う金融システムを構築する必要があります。この金融システムには、第2章で触れることとなりますが、別の貨幣循環方式が必要となります。

## 第2節 第二の誤解 - - お金を借りたときだけ利子を支払うという誤解

私たちの金融システムに対する利子および利子の利子（複利）の影響を十分理解することが難しいもうひとつの理由は、その影響が隠されていることにあります。たいてい人は、お金を借りたときに利子を支払わなければならないのであって、借金しなければ利子を支払う必要はないと信じています。

図表4から明らかなように、そうではないのです。私たちの支払うすべての物価に利子部分が含まれているのです。商品やサービスの提供者は、機械や建物を調達するために銀行に支払いをしなければならぬわけで、銀行への支払い部分が物価に含まれているのです。あるいは、投入した自分の資本を銀行やその他のところに投資した場合に得られたであろう利子として価格に上乗せされます。利子分は、私たちの購入する商品やサービスによって異なり、資本投下額に対応しています。

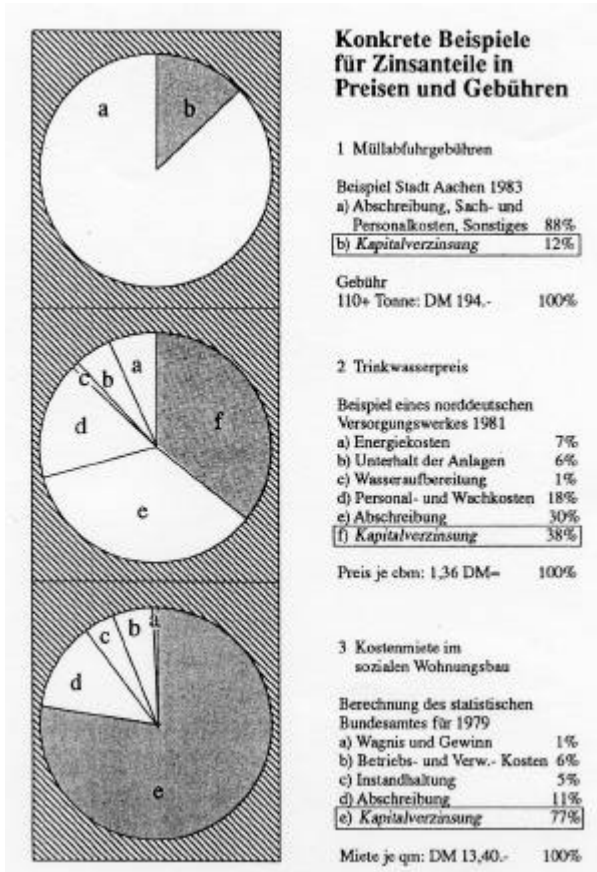
私たちみんなが支払っている公共料金のいくつかの例を見ると、この違いがよくわかります。ごみ処理料金における利子（=資本）コストは、ほぼ12%です。この場合は、借入コストが低いので、相対的に低くなります。しかし、水道代になると、利子負担の割合は38%になります。居住施設の賃貸料の場合、通常の年利6%とした場合、利子負担の割合は70から80%にも達します。

利子の負担が高いので、100年間利用する間に、買った場合の4倍ないし5倍の賃

賃料を支払うこととなります。今日、15万マルクする40平方メートルの住居は、年利6%とした場合、利子部分だけで年間9000マルク（月々750マルク）、家賃に含まれていなければなりません。100年経つと、買った場合の金額を支払ってもなお家賃が減らないとすると、支払い総額は75万マルクとなります。仮に、現在のように、年利を9%とすると、同じ大きさで同じ建築費の新築住居の場合、毎月の家賃は、50%上昇し、1125マルクとなります。さらにこれに、原価償却費と修繕費と家主の求める利益が加算されます。利子が高い時期に、住宅建設は減少し、住居費は多くの人にとって支払不能となるのは、ちっとも不思議ではありません。

平均すると、私たちは、日常生活に必要な商品やサービスの価格の中で30%から50%の利子コストないし資本コストを支払っているのです。それゆえ、もし、利子をやめて別の有効な流通メカニズムを採用することができたら、たいいていの人たちは所得が2倍になります。あるいは、現在の生活水準を維持するのに、もっと少なく働けばよくなります。

..... 図表4 .....



## 物価や料金における利子の割合の具体例

### 1. ごみ処理料金

例 1983年のアーヘン市

料金110リットル入りカン 194マルクを100%とすると

a) 減価償却費、人件費、物件費など 88%

b) 資本利子 12%

## 2. 水道料金

1981年の北ドイツの水道局の例

料金 1立方メートルあたり 1.36マルクを100%とすると

a) エネルギー代	7%	
b) 施設の維持	6%	
c) 浄水		1%
d) 人件費と監視費	18%	
e) 原価償却費	30%	
f) 資本利子		38%

## 3 住居の家賃

1979年の連邦統計局のデータより計算

1平方メートルあたり家賃 13.40マルク 100%とすると

a) 利益	1%
b) 管理費	6%
c) 保守費	5%
d) 原価償却費	11%
e) 資本利子	77%

価格における利子部分の絶対額は、投入された資本量およびそれへの利子によって、決まります。価格における利子部分の相対額は、物価に含まれる利子以外の費用、とりわけ、人件費、物件費、原価償却費によって決まってきます。たとえばごみ処理などの労働集約的な生産ないしサービスにおいては、価格における利子の割合は比較的に低めになります。水道代のように、設備投資コストが高いもの場合は、必然的に、利子の割合が高めになります。資本集約的な家賃のような場合には、利子の割合は価格の4分の3を超えるにいたります（ヘルムート・クロイツ）。

### 第3節 第三の誤解--現在の貨幣システムはすべての人に平等に利益をもたらしているという誤解

われわれの貨幣システムについての三つ目の誤った考え方は、次のように定式化できるでしょう。商品やサービスを買うためにお金を借りる人は皆、利子を支払わなければなりませんし、逆にお金を預金すれば利子が得られるわけですから、私たちの現在の貨幣システムはすべての人にとって、平等に優れている（あるいは害を与える）、というものです。

ところがこれは誤りなのです。実際は、このシステムで利益を得る人と、利子を支払

う人との間には大きな違いがあるのです。図表5に、ドイツ連邦共和国の人々を家計収入別に10グループに分けて、それぞれのグループの利子負担と、利子収入を比較したものです。

80%の人々は、利子収入より利子負担額の方が多くなっています。次の10%の人は、利子収入の方が利子負担分より若干多くなっています。残りの10%の人々が利子払いの額の二倍近くの利子収入があるのです。全体的に見れば、この利子収入の部分は、残りの80%の人が失ったものなのです。この図表からはっきりと、金持ちはますます金持ちになり貧しい人はますます貧しくなるメカニズムがわかります。このメカニズムがおそらくもっとも重要なものでしょう。

このシステムから利益を得ている人口の10%の人々の利子収入をより詳細に見てみると、改めて指數的成長現象がはっきり見えてきます。この中の10%（全体の1%）の人々にとっては、利子所得を示す棒グラフはほぼ5倍になります。その中のさらに1%（全体の0.01%）の人々、ドイツの86人の億万長者（1990年の経済雑誌「フォーブス」の調査による）の場合は、2000倍になります。利率が6%だとすると、86人の長者たちは毎日約37万2千マルクずつ裕福になっています。

つまり、貨幣システムにおける利子の役割により、お金の再配分が行われているのです。この再配分では、仕事上の能力が問題ではないのです。その人が、自由な市場経済を、つまりは商品やサービスの交換を、交換手段を出し惜しみして妨げ、利益を受け取れるかどうかの問題なのです。そのため、皮肉にも、常にお金が、必要以下のお金しかなくてお金を借りなければならない人から、必要以上にお金を持っている人に移動していくのです。

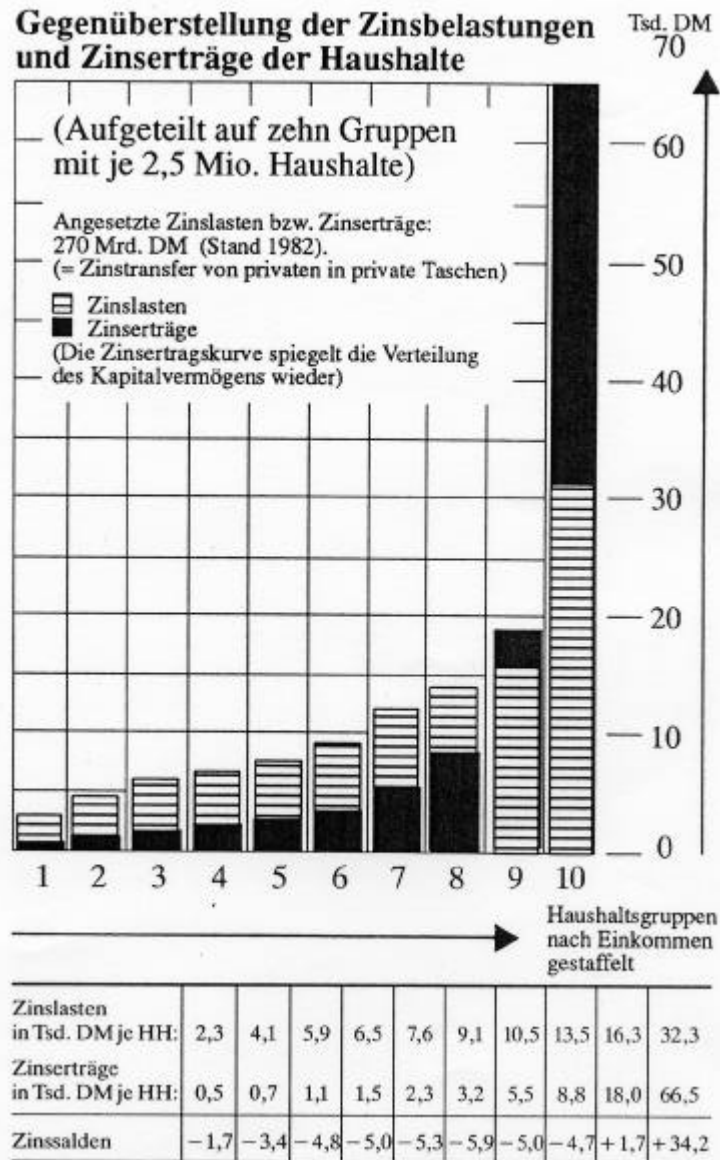
これはまさに、カール・マルクスが克服しようとした搾取の形態よりもさらに一層微妙で効率的な搾取形態なのです。もちろんマルクスは、剰余価値の源泉を生産の領域に求めた点で正しかったのですが、分業型経済においては、剰余価値は、貨幣と商品の流通領域、いやますます多くの部分が貨幣領域ではじめて実現するようになっているのです。

長期にわたる経済成長が終わり貨幣が金本位制から離脱した今日では、マルクスの時代よりも明瞭に、流通領域で剰余価値が生まれる様子を理解できます。終焉の兆候は、ますます多くの貨幣量が、ますます少数の人ないし会社に集中するところにあらわれます。もうひとつの兆候は、1980年以来何倍にもなっている世界的な金融上の投機から生まれる利益です。1987年にはまだ全世界の一日の為替取引額は、まだ2000億ドルでしたが、いまやすでに6000億ドルに達しています。世界銀行の試算によれば、全世界の国境を越えた通貨取引ですが、商品の交換に必要な金額の、ほぼ15ないし20倍です。

単利および複利の利子メカニズムは、単に病理的な貨幣量の増加や経済の成長を生み出すにとどまりません。このメカニズムは、ディーター・ズーアが示しているように、人間の憲法上の権利にも反しているのです。憲法が市民に対し国家のすべてのサービスに対する平等のアクセスを保障しているとすれば、そして、金融システムがそうしたサービスのひとつであるとしたならば、このシステムの誤りにより国民の10%が多数の犠牲の上に常により高い利益を得られるというのは、憲法違反です。

われわれの貨幣システムの改革は、人口の80%に「しか」役に立たないように見えるかもしれませんが。つまり、現在手に入れる以上に利子を払っている人々だけに役立つように見えるかもしれません。しかしながら、第3章で述べますように、この解決策はすべての人にとって利益になるのです。長期的に見れば、この解決策は、現在の病的なシステムで利益を得ている人々にとっても利益をもたらすのです。

-----図表5-----



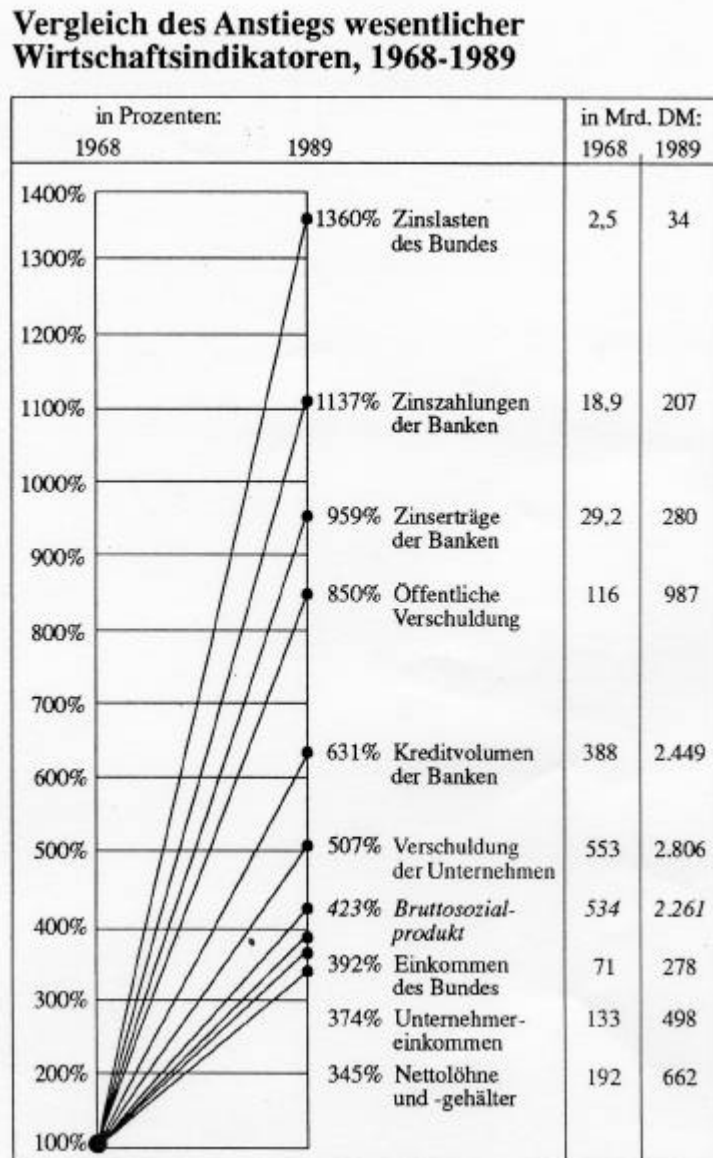
家計の利子収入は、その家の持っている預金から得られます。利子負担の方は、3マルクのうち1マルクは利子向けの支払いなので、全支出の3分の1に当たります。家計における利子収入の増加割合は、所得や支出のカーブより急なカーブで増加するので、この表に示されるように最後の10%の人々が多量の利子収入を得ることになるのです。その結果は、所得が、もっぱら労働に依存して生活している多数の人々から、もっ

ばら所有する金融資産に依存して生活している少数者へと移動していきます。経済実績に比べて貨幣量が膨らむと、この再配分は加速され、利子率が高いとさらに一層加速されます（ヘルムート・クロイツ）。

#### **第4節 第四の誤解--インフレはどの貨幣システムにもついてまわるという誤解**

四つ目の過る仮定は、現在の経済システムにおけるインフレの役割に関するものです。たいていの人たちは、インフレすなわち貨幣の購買力の下落は、ほとんど自然現象だと思っています。というのは、インフレを克服した資本主義国は世界にないからです。重要な経済指標に関し（ドイツの）増加率を比較した図表6は、インフレと密接な関連をもつひとつの傾向を示しています。つまり、実際の成長率と金融上の成長率の差が、利子の働きによりますます拡大しているのがわかります。ドイツ連邦共和国の所得つまり国内総生産および賃金や給与は、1968年から1989年の間に4倍に増加していますが、同じ期間に利子負担はほとんど14倍になっているのです。

-----図表6 重要な経済的指標の増加比較、1968-1989-----



有機体は、すべての部分がひとつの全体を目指して発展するとき安定します。他のすべての部分量が目指す経済における「全体」とは、国民経済の業績すなわち国内総生産です。この量にあわせて、すべての経済的要請が、すなわち企業家や労働者の収入や国家や資本の収入が増加します。

上図の増加の比較から、現在の国民経済の成長と分配のやりかたは維持できないことがわかります。クレジットや負債の量は、総生産より早く増加しますし、利子関連の増加はさらに急速に増加します。連邦の収入や企業や労働者の所得は、これに対しますます遅れをとります（ヘルムート・クロイツ）。

ですから、国民経済の負債と負債につく利子の合計は所得よりも急激に増加するので、これは遅かれ早かれ、産業国家においても、破局がやってくることを示しています。

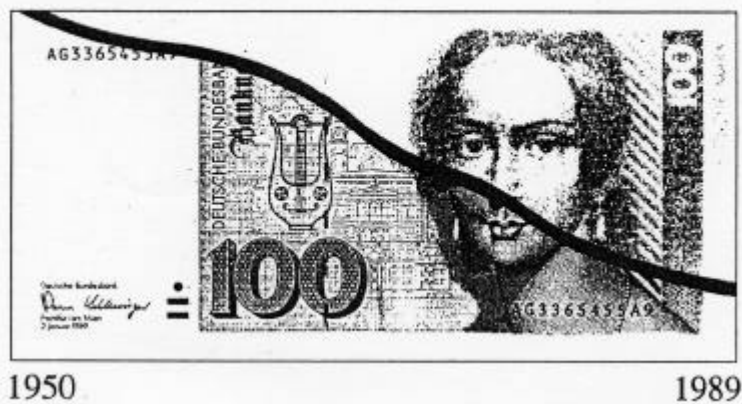
子供の体が、2歳から10歳の間に四倍になるのに対し、足あるいは肺が同じ期間に14倍になったとしたら、誰だって病氣と気が付くでしょう。問題はごく少数の人しか貨幣システムの病的状態に気が付いておらず、治療薬を知っている人はさらに少数の人でしかないということです。というのは、今までのところ、誰一人として、永続する健康な貨幣システムを発展させることができなかつたからです。

増大する負債という最悪の問題を政府が解決できるひとつの可能性は、実際の労働や生産から生まれる価値以上のお金を発行することによりインフレを生み出すことなのです。

発券銀行が政府の指揮下であり、紙幣を増刷することに制限が加えられない国々ではとりわけこの方策が取られやすくなります。しかし、「独立の」発券銀行を持つ国々においても、貨幣供給量を現実の経済にあわせることに成功したためしがありません。図表7が明瞭に示していますように、ドイツマルクは1989年には、1950年の貨幣価値で28プフェニヒ（1マルクは100プフェニヒです。記者注）の価値しかありません。こうした貨幣価値の下落は、資産を「インフレに耐える」土地資産や物的資産に投資できない人々にとってもっとも厳しいものとなり、最高の所得を得、最大の土地資産や物的資産を所有している少数の人々は、もっとも打撃が少ないのです。

---図表7 インフレにより1マルクの価値は28プフェニヒに下がってしまった-----

### Durch die Inflation ist die Mark nur noch 28 Pfennig wert



基準というものは、その測定目的を達成するためには、一定でなければなりません。これは、長さや、容積や、重さの基準にあてはまるだけではありません。最も重要でよく使用されるお金にもあてはまります。

グラフに見られますように、お金の基準は、1950年以降1950年の3分の1以下に減少しています。1950年の1マルクは1989年には30プフェニヒの価値にもなりません。それゆえ、1950年に100マルクの仕事をして、その対価をしまっておいた人は、1989年には3分の1の対価しか受け取れないこととなります。しかも、このお金の基準の絶えざる「下落」は、同じ割合で起こるのではなく予測不能でジグザグしながら起こるのです。

戦争が、想像しうる最大の暴力犯罪であるように、利子は想像しうる最大の搾取であ



ります。同様にインフレは、誇張なしに、考えうる最大の詐欺であると言えます。多くの些細な悪事に対して、資本をめぐるこの三つの犯罪、戦争、利子、インフレは、すべての国家によって正当化されているのです（ヘルムート・クロイツ）。

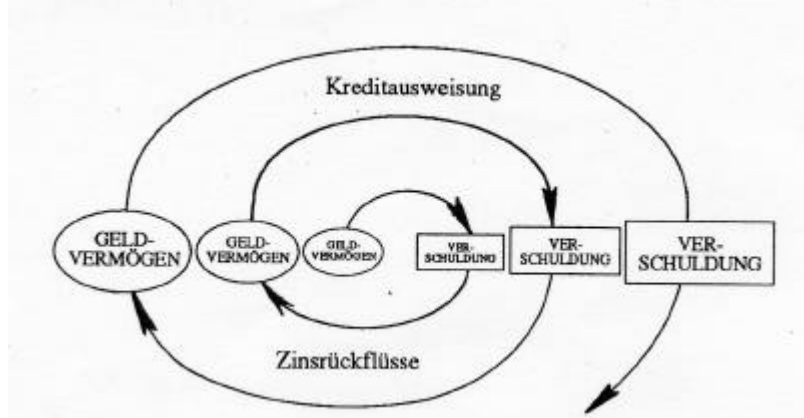
経済史家のジョン・L・キングは、「アメリカの信用膨張」に関し、インフレと利子払いの並行関係を指摘しています。1988年の1月に彼は私に次のように書き送ってきました。

「私は、これまで、利子が物価の上昇の最も重要な原因であると口をすっぱくして言ってきました。というのも、利子は、私たちが購入するすべてのものの価格に含まれているからです。ところが、この考え方は、事実合致しているにもかかわらず、今まで受け入れられませんでした。国内に9兆ドルの負債があるとすると、利率10%として、9000億ドル分を価格に上乗せして支払わなければなりません。この上乗せ額から、専門家がインフレとみなす4%の物価上昇が生まれるのです。私は、単利や複利を、常に、見えざる破壊機構と考えてきました。この機構が現在まさに冷酷なまでに作動しているのです。私たちは、こうした愚かしい財政上の執着から解放されなければなりません。

ここ33年の間に、アメリカの公的負債と私的負債は、1000%増加しました。このうち大部分は企業と家計によるものです。信用上の取引を支え経済をさらに過熱させるために、政府はあらゆる方策をとっています。たとえば、貸し付けするさいの担保を調整する、補助金を出して抵当率を低くする、家屋や消費財を買う際の自己負担率を下げる、手形を切る条件を緩める、税制上の優遇策をとる、二次市場、現金化の保証など。

こうした政策がとられるわけは、貨幣資産を再投資し貨幣の流通を維持し利子システムの帰結を国民の大多数にとって耐えられるものにするためなのです。貨幣資産の幾何級数的成長に従う急速な経済成長により、利子システムの社会的帰結がしばらくのあいだ見えなくさせられているのです。悪循環の輪がますます速度を上げて回転する結果、利子負担はますます大きくなり、貨幣資産はますます膨らみ、負債はますます増加し、不平等はますます激化し、環境への影響がますます悪化することになります（図表8参照）。それゆえ、こうした破壊的な財政上の利子メカニズムを別の流通機構に変えなければなりません。

-----図表8 貨幣の悪循環-----



ますます早まるお金と借金の量の増加がグラフで示されています。貨幣量が大きく増加するとそれに応じて信用取引が増加し、負債が増加します。負債の増加は、貨幣量の増加を招き、それがさらに負債の増加を促すのです。

この循環は、（マイナスのフィードバックがかかり）増加が減速する自然の循環とは異なり、自然に反する（プラスのフィードバックのかかる）循環、ますます増加が早まる循環です。自然界には、こうしたプラスのフィードバックのかかる循環は病的発展たとえば腫瘍の発展にしかみられません。腫瘍の成長が止められなければ、生物的有機体はやがて死滅するほかありません。同じことが、貨幣量と負債が常に増加する国民経済にもあてはまります（ヘルムート・クロイツ）。

発券銀行の理性的な金融政策によりつまりは流通を保証するとされる利子を廃止することにより、恒常的なインフレの根本原因が取り除かれることになるでしょう。

## 第一章 原注

1 Danach ergeben sich vom Jahr 0 bis 1990 bei jährlichem Zinszuschlag folgende ausgewählte Kontostände:

Jahr	Rechnungseinheit DM	Rechnungseinheit kg Gold am 9. 1. 90 18 500,- DM/kg	Rechnungseinheit goldene Erdkugeln (5,973 E + 24 kg)
0	0,01		
95	1,03		
100	1,31		
142	10,20		
189	101,10		
236	1001,55		
296	18708,22	1	
438	19094706	1026	
1466	1,16 E+29	6,22 E+24	1
1749	1,148 E+35		1 Mill.
1890	1,116 E+38		1 Mrd.
1990	1,468 E+40	8,026 E+35	134 Mrd.

Heinrich Haufmann: *Der Josephpfennig*. Fürth 1990.

- 2 Paul C. Martin: *Der Kapitalismus: Ein System das funktioniert*. Langen-Müller/Herbich, München 1986, Seite 46
- 3 Spiegel-Interview mit Alfred Herrhausen: »Ich sehe die Risiken ganz genau«, *Spiegel* Nr. 25, Hamburg 1987, Seite 59
- 4 Helmut Creutz: »Wachstum bis zum Crash«, *Schriftenreihe zum Thema Geld*, Heft Nr. 4, Seite 2
- 5 Dieter Suhr, *Geld ohne Mehrwert – Entlastung der Marktwirtschaft von monetären Transaktionen*. Fritz Knapp Verlag, Frankfurt/Main 1983